

『富山親学フォーラム』

平成 15 年 12 月 6 日 13:30~17:30

富山電気ビル

『パネルディスカッション』 14:40~15:50

参加者 高橋史朗 松村文子 鍵山秀三郎 百瀬昭次 小沢伊弘

(司会者) パネルディスカッションを始めます。パネルディスカッションに入る前に、本日のパネリストとコーディネーターの皆様をご紹介します。

まず、基調講演をしていただきました高橋史朗先生です。先生のプロフィールについては割愛させていただきます。続きまして、株式会社イエローハット取締役相談役 鍵山秀三郎様です。鍵山様は『ロイヤル』を創業、自転車一台の行商からスタートし現在『イエローハット』を全国に展開されていらっしゃいます。また、創業以来続けていらっしゃる掃除に多くの方が共鳴され『日本を美しくする会』を創設されました。その後全国各地に掃除に学ぶ会が誕生し、国民運動となっています。主な著書に『日々これ掃除』『小さな実践の一步から』『凡事徹底』などが多数あります。続きまして百瀬創造研究所所長 百瀬昭次様です。百瀬様は鋼の凝固の研究で、昭和 43 年日本鉄鋼協会『俵論文賞』を受賞。また各種ゼミナールの推進キャンペーンの展開や、各方面の講演やセミナーでも活躍されていらっしゃいます。主な著書に『君たちは偉大だ』『家庭ゼミナールのすすめ』などがあります。続きまして有限会社食養の杜とやま代表取締役社長 松村文子様です。松村様は富山県庁勤務時代、農村生活の健康管理・農村生活技術指導などをされました。現在は体の生命力を高めるお弁当、幼稚園児の福祉給食、立山の薬膳五穀押し寿司などの開発もされています。以上パネリスト 4 名の皆様のご紹介でした。

続きまして、コーディネーターをご紹介します。株式会社アイバック代表取締役 小沢伊弘様です。現在は富山県国際化主任専門員としてご活躍中です。専門分野としては、企業コンサルティング、コンピュータサイエンス、都市計画などがあります。それでは、小沢様よりしくお願いいたします。

(小沢) 皆さん、こんにちは。

(会場一同) こんにちは。

(小沢) 小沢でございます。それではこれより、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

今日高橋先生から「親が変われば子が変わる」ということでお話をうかがったわけですが

れど、その中で最近まさにおっしゃるとおりアメリカで、プリ・フロンタルローブと、前々頭野という。最初はフロンタルローブ、前頭野というのが有名だったわけですね。これ大体30年くらい前に映画で『One Flew Over The Cuckoos』という『カッコウの巣の上で』という映画があって、これはジャック・ニコルソンが出演したわけですけども。精神病をとった患者がロボトミーというやつで、前頭葉を切る手術をすると、人間は廃人になっちゃうわけですね。おとなしくはなるけども、何もやる気がなくなってしまうという、そういう物語があって。かつてアメリカでもそういう乱暴な手術をやってたわけなんです。人間を廃人にするような。

今は科学がどんどん進んできますと、新しい脳の働きとかそういうことがわかってきたと。今まで、例えばイデオロギーがあるわけですね。これは和製英語なんですけれど「ジェンダー・フリー」という言葉があるんですよ。「ジェンダー・フリー」というのは男女平等のひとつとして、ジェンダーというのは文化的な意味を含めてなんでしょうね。でもこれは和製英語なんです。「ジェンダー・フリー」というのは全く。今科学的にわかってきたのは、男女の違いっていうのは脳を見れば、はっきりそれが出てくるという事も徐々にわかってきて。確かに今イデオロギーとかいろんな物がありますけど、これからそういった物が科学的に本当にそうなのかということが、どんどん証明されていく一つの時代になってきているんじゃないかと。

ただ、今日のお話にありましたように、そうしますと手作り神話。子育ての手作り神話と呼ばれているもの、そのものも本当にそうなのかと。本当に色々かつて言われてきたことが、実際それはただ単なる迷信とか、そういったことだったのかと。それがまた新たに科学的な脚光をあびている。科学的に証明されていく時代になってきていると思うんですよ。そうじゃない、イデオロギーっていうのはたくさんあります。イデオロギーで今、例えば文部科学省なんかでも、何かこちらから見ると特殊なイデオロギーじゃないかと思うような形で進めていらっしゃることもありますし。イデオロギーでは世の中もう、解決できなくなってきていると。そういったひとつの時代に今、なっているんじゃないかというふうに思います。

それで、今日それぞれの分野でそれぞれの経験をお持ちになってきていらっしゃる方々に、まず最初は現状...今何が問題なのかと、社会において。なぜこのような、社会でいろんな事が起き上がってきて一体何が問題かということ、をまずお話ししていただくということで。高橋先生は先ほどお話になりましたので、後でまたお話をうかがうということで。まず、鍵山さんのほうからご自身が捉えていらっしゃる今の、全般的に見渡した社会の中で何が一つの課題なのかということでお話願えればというふうに思います。

( 鍵山 ) はい。皆さんこんにちは。

( 会場一同 ) こんにちは。

(鍵山) 「この町の子供たちは、この町の大人たちの姿を見て育つ」という言葉がありますけれども、まさにこのとおりで子供たちは町の大人たちの姿、あるいは家では両親です。おじいさん・おばあさんの姿を見て育っているわけでございます。それが小学校くらいまでは純真無垢の子供たちが中学になると自分の意志において、その社会を乱す行為をとる子供たちが出てまいります。高校生になりますと、これがかつてのあの純真な小学生であったのかと思うくらいですね、無気力になったりあるいは機械的になったり、動物的になったりする例が非常に多くなってまいりました。このように変わっていくのはどうということなのか。私、昨日は福井県の敦賀の小学校にありましたけれども、いつでも小学生は純真で目が輝いていて、明るい顔をしていますね。これが中学生・高校生になって、どうしてこういうふうになっていくのかと。いずれも原因は大人の姿にあるよう、私は思います。

電車になんか乗りましても、大人が横着な態度です。実にこの、暗い夢も希望もないという姿で立っているあるいは座り込んでいる姿を見ますと、子供たちがおよそ夢や希望を抱く姿ではない。また、家でもおそらく同じような事が起きているんじゃないかと思うんですね。この事から変えなくてはならないと思うんですけど、それでは大人がどうしてそうなるのか。私は、これは企業に大変な責任があるように思いますね。

先ほど高橋先生から、能率・効率を追求しすぎたために起こる弊害をお話されていましたが、本当にそのとおりでございます。能率・効率は大切なことではありますけれども、度が過ぎればかえって大変な弊害を及ぼすものでございます。度の過ぎた能率・効率の追求が人の心をどんどん荒らして行って、人間から心を奪い去っていくというですね、こういう現象が今どんどん強く起きております。

J・S・ミルですね。ジョン・スチュワート・ミルが「自らの新の幸福とは、他人の幸福を奪うことなく自らの幸福を追求することである」というふうに言いましたけれども、今の日本は他人の幸福を奪うことによって、企業を繁栄させるといったそういう図式がですね、非常に強くなってきました。このことが大人の青春を奪い、そして子供たちの心を変えていっていると、このように私は思います。まだ他にも原因はたくさんありますけれども、これが最も私が懸念をしている問題でございます。

(小沢) どうもありがとうございます。大人の一つの姿が、今の現状だと。その中で高橋先生の中にもありましたように、効率追求ということ。ただ、効率追求でも二通りの効率の追求があるわけなんです。ひとつは高橋先生のおっしゃった、コーンシュマライゼーション...消費における効率ということと、もうひとつはクリエイションにおける効率、ものを作っていく上での効率っていうのはどれだけでも高めていかなければならないんですけど、消費における効率というものをどんどん進めていきますと、もう正しい・間違っただ、はないんですね。どれだけ効率を上げればいいのかという。もう今は、そういう危険な

時代に入っているということだというふうにお話をおうかがいしました。

それでは、百瀬さんのほうから今捉えてらっしゃる現実の課題みたいなことを、お話を願えますか。

(百瀬)　　みなさん、こんにちは。

(会場一同)　　こんにちは。

(百瀬)　　今日はこうして、富山のたくさんのすばらしいみなさんにお会いする機会を得ましたことを、大変うれしく光栄に感じ感謝しております。少しでもご期待に添えるようにお話ができればと思っておりますが。

今日のテーマ「親学」ということですが、すけれども、「親学」を「親学」として捉えるときにですね、もう少し広い視点から今なぜ、日本で親学かと。今なぜ富山で親学かと。そういうトータルにものを捉える考え方が非常に大事だと思います。なぜかといいますと、この出会いということが非常に大事でありまして、今日、みなさんとうちやうやう出会っていますね。みなさんこれは、何も思わないかもしれませんが、確率からいうと天文学で数十分の一の確率で出会っているんですよ。私がこうやってお話しするような事を逆に遡ってきますよね。とんでもないといいますか、奇跡の奇跡みたいな理由がいっぱい背後にあるんです。そういったことをクリアしながら、本日こうしてみなさんと出会っているという、そういう意味があるんですね。ですから、奇跡と当たり前は紙一重であるということ、案外あたりまえに過ごしていることの背後に大事なものが隠されているという、ひとつの表れだと思いますけれども。そういう点からしますとね、今なぜ、今という時代との出会いということをも。今はどういう時代かということを知らないと。今は有史以来の大変革期と言われてます。有史以来の変革期ですから、2000年に一度のめったにないような、大きな変革期です。まさかと思うことがあたりまえ。前例がないことが起こる。前例がないことをやって、ちょうどいいくらいのそういう大きな変化が、一番今重んじられるといいますか必要な時代であるということ。みなさんご自身が、今のご自身よりももっとすばらしいご自身にですね転換していく。家庭のあり方企業のあり方国のあり方、全てのもので大きく変革していくという、自己変革をすることが当たり前の時代なんです。みなさん、いかがでございましょうかね。そういう変革という意識というか、そういう感じがどのくらいしていらっしゃるか。実際どのようにしていらっしゃるかですね。

今デフレ不況とか言われています。企業のご専門の方を前に、あれですけれどもデフレ不況がなぜいつまでも続くかという、そういう素朴な疑問ですね。これは、教育にも関係があるんです。デフレ不況というのは、ものをいくら作っても付加価値の高い、お客さんが本当に求めているような製品、あるいはサービスでないと受け入れませんよという質の高いことを象徴している現象ですね。お客さんが本当に求めているという、そういう。です

から、今時代は良質化、変革期というのは一つの時代からもっとハイレベルな時代に飛躍していき、そういう絶好の時代に今来ているんです。それに気がつかないから困ることが起こるんです。困ることが起きるといのは、困らせることが目的ではなくて。江戸時代の幕末の黒船ではないけれども、困るという形を通じて意識を転換しなさいという。形と中身は全く逆なんです。形を見たら中身をつかむという、こういうより質の高い生き方、そういう域にレベルに持っていき、それが一番望まれているのは世界でも日本なんです。日本しかそれが、ぐんぐんできない様々な条件でね。ですから、日本では様々な問題が起こっています。特に今の教育の問題に話を戻しますとね、子供たちは何を求めているかとう、これがね、ほとんど判っていなかったんですよ。いいですか、今の経済不況と同じようにですね。一番彼らが求めているのは何なのかということ、一言で申しますと人間学の基本を、彼らは真剣に求めています。人生の目的は何なのか、自分が今この時代に生まれてきているということは、どういうことをしてどうなのか。自分の存在価値はどうなのか。自己実現どうしたらいいのか。夢を実現したい、どうしたらいいのか。勉強はなぜ必要か。受験はなぜ受けなくてはいけないのか。受験とは何なのか。そういった本質的な一つ一つのことを、はっきりと心の琴線に触れるようなことを学びたい、教えてほしい。生きるための必要を作りたいんだと。いいですね、これを求めているんです。これはまた後でお話ししますけれど、学校でそういう現象がはっきり現れました。

片岡中学校という高崎市の公立の学校。レベルの普通か、もうちょっと低いかな。その学校です。『君たちは偉大だ』という私の本があるんです。ご存じの方いらっしゃいますか？知らない方。PR不足でした。これは1980年に出た本なんです。それが今34刷位になって、本そのものがずーっと歴史を生きてきて、私を励ましてくれていたんですけども。これを今学校で正規の授業で、先生が率先して生徒に本を持たせて、そうして朗読をするというやり方、その感想文がドーンと来たんですよ。155人分学年全員の。それにですね、こういう事を知りたかったんだと。人間学のたたき台の本、私の書いたもので大したものではないけれども、彼らにとっては非常に新鮮です。こういう本を、こういう事を知りたかったんだと。先生またこの本を書いてくださいってというようなことを、ほとんど全員が同じようなことを書いているんです。ですから勉強しない子が「勉強します」とか、本を読まない子は「本を読まなくてはいけないと気がつきました」とかですね。「先生、元気ががんばってください」とかですね、そういった率直な言葉を添えて、全員の感想がドンと来たのでビックリしました。そしたら次にですね、生徒の方から、また先生やってほしい。『君たちは受験生』という本がありまして、これも受験を通じて人間づくりをする本。それもないものですから、わたしが書かざるを得なくなって書いたんですけども。それを生徒の方からやって欲しいと言い出す。最初国語の先生が、4クラス各4時間ずつ16時間読んだんですよ。今度は各担任がやったんです。その感想もまたドンと来たんです。今度は話も聞きたいというような子もいて、寒い日だったけども話をしたら、500人分の感想がまたドンと来たということで。その学校はこの2冊を、中学生在学中にですね全員マ

スターするというのが、年中行事みたいになって学校がガラッと変わっちゃったんです。今その輪が広がりつつあるんです。私は前からわかっていたんですけれど、学校ぐるみでこういう事が起これば、ちょっと説得力があるんじゃないかということで期せずして待っていたところが、まさしくその手の事が現実にパッと起こりだして、これで二重のビックリということで。事実そういうことがあって、あと人間なりでやっていけばかなりのことがなされるんじゃないかと。彼らの求めている事の本当の本音ですからね、満たしてやれば先生の信頼、先生と信頼関係も生まれますし、生徒にとっても両方にいいということで、これをみなさんに知っていただくことが、今日の私がみなさんとお会いした大きな役割じゃないかということで、自分のPRがましくて恐縮ですけども、そんなことでまた後でゆっくり詳しくお話ししたいと思います。ありがとうございました。

(小沢) どうもありがとうございました。そうですね、百瀬さんの方からおっしゃったように今何が一番必要かという、変革ということですね。変わらないと生き残れない。これは企業の世界で全く言われているんですけども、おそらくこれから3割方が勝ち組に入って、7割方が負け組に入るだろうと。で勝ち組は、ドンドン伸びていこうと。じゃあ、その条件は時代にあわせて変わったところということが一つの条件になってきているわけなんですね。そうしますと今おっしゃったように、まさに一つの大きいイデオロギーとかいろんなものの流れで、俗に常識とされてきていることが流れてきますけども、そこでよくよく考えて、新しい時代に何が本当かということを実際に考えて、変革することが非常に必要なんじゃないかというお話だったと思うんです。それともうひとつは、子供は学びたいんだと。人間は昔からよく言われているように、人間というのは教育しなければ人間にならないんだと。狼に育てられれば狼になる。人間に育てられて初めて人間になるんだと。そしたらどういう人間にしたいかということ、人間学っていうものをしっかり教えないければ、それはそういうふうにならないわけですね。それをほったらかしにしておいては、絶対になるはずはないっていうのは昔からわかっているんですけども、何か特殊に、今個性の尊重とか何とかということで、個性...実体のないものに対して個性を持つということが無理矢理進んでいるような気がいたします。そういったところで、今人間学を子供たち自身が学びたがっているという話をおうかがいしたわけです。松村さんのほうは、非常に食といますかそのあたりで色々やってこられて、それをご覧になって今社会で問題っていうのは、何だとお感じになられますか？

(松村) はい。今日ですね、こうして色々とお話しできることに對しまして、とても感謝したいと思います。本当にありがとうございます。私たち一人一人が一生を全うしていくわけでございますが、そうした中でともに深く見直さなければならぬと申しますか、一つの実践できるきずきの柱として、私は食事作りを挙げています。食事作りの中で、色々私も県庁時代38年間、本当に暗がりから暗がりま

で共に働かせていただきました。そして色々してきたことを今実践しているわけですが、その大きな柱として3点を挙げております。ひとつは、主食を180度回転して、今先生がおっしゃっていらっしゃるような大変革期を乗り越えて、しっかりした21世紀の子育て、あるいは生命力の高い体づくり。そうしたものの柱に、食事を挙げてその中のひとつを無精白のご飯と申しますか。今富山県のおいしいお米として、コシヒカリなどがあるわけですが、このコシヒカリをですね精白じゃなくて五分づきにいたします。その五分づきのコシヒカリにさらに、先ほどからの親学で色々話題になっておりますところの、多動性の問題あるいはまたノイローゼの問題、そういったものに非常に臨床実験で効果が上げられておりますキビですね。こうしたキビとか、あるいはアワとかミネラルの宝庫...小さなミネラルの固まりを持った雑穀類を入れた主食を、一日三回の食事の中で、一食の中で少なくとも50%から60%位のシェアを占めるくらいに位置づけまして、しかもそれをよく味わって、感謝して噛むことを大切にしております。噛むことによって、非常に殺菌力の高い唾液。唾液の中にも若返るためのホルモンもございます。そして、噛むことによって先ほどから話題の前頭葉が活性化いたします。そういったことからですね、ひとつは主食改善をしております。

それから2点目としましては、調味料等全く無農薬で、天然醸造した天然のものを使っております。特に油などは圧搾式にしたり、それからお塩とかいろんなものをミネラルの豊富なものを厳選してやっております。そして、本物の調味料で作った本物の味を特に7歳位まで、先ほど臨界期の話がありましたが7歳くらいまでの子供たちが体験した味が、その子供にとって一生左右するわけなんですね。そうした事を心配いたしまして、なんとか幼稚園の子供さんたちに本物の味を食べていただきたいと。あるいは、一生懸命働いていらっしゃるお父さん・お母さん方に対して、おいしい本物の弁当を食べていただきたいということのひとつのファクターとしてですね、手作りの本物の味づくりを大事にしております。

それから更に3点目としては、色々あるわけなんですけれどもやはり、食事の機会は子供にとっての良い習慣を話し合うひとつの場であるということで、食事環境と申しますかあるいはまた、一年の中でハレの日に小豆のご飯をいただいて、そして昔々小豆ご飯はみんなが疲れたときに何とか元気を出そうということで小豆を食べたとか、あるいはまた、1月15日に柿の木に、赤いアカゾロ(小豆粥のこと。新川地区方言)を作って今年も抱負に農産物が実って下されるようにということで、柿の木にお願いを掛けた...そういった物語など親子そろっての食事環境の大切さを訴えて共に勉強していきたいな、そして共に精進したいなという思いでございます。また、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございます。

(小沢) どうもありがとうございます。ある学者...アメリカ人だったと思いますけれど、「You are what you eat」というのは「あなたはあなたの食べて

いるものなんだ」という。食べているものであなたは決まるんだという言い方をしているわけなんですよ。これはファーブルの『昆虫記』っていう中でファーブルが言っているのは、昆虫でも人間と一緒にだと。昆虫でも肉食の、肉食ばかりやっている昆虫は気が荒くて非常に短気でとやかくやる。人間も慎ましやかに感謝をして、ミルクとパンでしっかり食事をして、家族一緒に食事をしているところから、まともな人間が出てくるんだって、ファーブルの『昆虫記』でファーブルはしっかりそれを言っているわけですよ。そこがファーブルの単なる昆虫学者ということじゃなくて、偉いところだと思うんですけど。その位に食べる物っていうことに対しても、我々は本当にこれから注意を払っておかないと、今何でもいいからっていう感覚で行くと、それがそれを決めていくと。そういったところで、今松村さんも色々提唱されたり、今日のワークショップもございますので参加される方も非常にラッキーなんじゃないかと。そのあたりよくまた、お聞きになってやられるとよろしいというふうに思います。

今いくつか課題をあげてきていただいたわけなんですけど、全体を総合して、先ほど高橋先生の色々お話があったわけなんですけども、ポイントとして今の課題を先ほどの講演混ぜ合わせて、箇条書き的にちょっとまとめていただければと思うんですけど。

(高橋) なかなか難しい事でございますが、元々よく「育児は育自」と言いますよね。子供を育てることは自分を育てることだと。でも育児が育自にならなくなってきているといいですか、子供を育てることによって親が親らしくなっていない。親心が育っていないという問題が今、私は一番根本的な問題。それを今日は「親心崩壊」とか「親性崩壊」ということを言ったんですが。それで、先ほどイデオロギーの問題が出てきましたが、今教育の場はなかなかイデオロギー対立が激しいんですが、イデオロギーを越えるのは「育」視点に立つということだと思うんです。何が子供の主体を形成するのか。何が子供のアイデンティティを形成するのか。何が子供たちのイキイキ・ワクワクを内側から引き出すのかという「育」の視点に立てば、イデオロギーを超えることができるわけです。それで私は、脳科学に注目しているわけなんですけれども。その「育」という何を育てる必要があるのか、どう育てればいいのかという関わり方が、親も教師も少し混乱をしているんじゃないかと。そして今日申し上げた、自己決定権に見られるように、これは千葉県に行ったときに「フリーセル保育」というのをやっているところがありまして、「1歳以上の幼児にはおやつを選択する自由がある」と言ってですね。どこで遊び、何を遊ぶかを子供に決めさせるというんです。保護者が参観したいと言ったら、それは子供の意見を聞いて決めるというんですね。これは誤った児童尊重主義で、つまり子供が自立するためにどういふかわり方をしなくてはならないのか、何が必要なのかという認識が大人の側に欠けていることが問題ではないかと。

そこで、育てるといふことの大事なポイントを整理すること。それが「親学」といふことの大事なテーマではないかというふうに感じました。

それからもう一つは、日本の問題がちょっと出てきたんですが。僕は、人類の将来の鍵を握っているのはこの国だと思っております。それはある意味で、親と子の心の絆というのが非常に強かったのが、この国の特徴であります。家族というものを大事にしてきた。それから、ふるさとのぬくもりというのを大事にしてきたというのも、この国の特徴だと思うんですね。それは拉致問題にもよく表れて、24年の空白を埋めたのはそういうものだと思うんですが。その日本が世界に誇るべきものが、どんどん崩壊しつつある。それが危機であり、実はそれを日本が失ってしまえば、人類の将来にも大きな影響を与えるくらいの問題ではないかと。だから日本人が大事にしてきた子育ての知恵を、もう一回創造的に再発見して自覚を取り戻そうと。

実は私は、アメリカに30の時に留学をして、GHQ文章というのを240万ページ研究したんですが。そして240万ページのGHQ文書を研究して、アメリカが悪いのはよくわかったんですが、問題は日本人だということに気づきまして。アメリカはいろんな誤解をしました。例えば国語改革をしようとしたんです。でも国語がいかに大事かということ、今脳科学が音読が大事だと、読書が大事だと。これがPQを育てるといふうに言って、小さい頃からすばらしい日本語に触れさせることが大事なんだということ、今新しい発見をしているわけですが。そういう観点から、もう一度世界の中の日本というものの大事なポイントを、もう一度わたし達が再評価・再発見していく必要があるんじゃないかというようなことを感じました。

(小沢) どうもありがとうございます。今の中でひとつ課題になってきたのが、子供の自立っていうことも重要なんですけども。じゃあ、いつ自立のタイミングなのかと。ひとつあるわけですよ。これは、ルドルフ・シュタイナー...シュタイナー教育で有名な、ワールド教育っていうやつですよ。彼がいつ出ているのは、子供っていうのは7歳で大体自我がまず、ひとつ出てくると。それから次に展開としては、14歳・15歳位で。だから今、中学の事件でいろいろ問題になっているのは、このあたりの転換期での方向性を見失っている要素もあるわけですね。そこで完成したのかということそうではなくて、また7歳って21歳ぐらいで大体人間としての自我が確立するというを、ルドフル・シュタイナーあたりは言っているわけですね。ということは、やはりそこまで...はっきり言って21歳くらいまで。二十歳を過ぎれば選挙権を与えられてお酒を飲んで、色々してもいいということになっていますけれど、早熟な人はそうかもしれませんが大概遅れていて、21歳でようやく一人前の雰囲気であるということ、ルドフル・シュタイナーあたりはそれを言っているわけですけども。それまでにしっかりとしたことを教えていかなければいけない。で、社会が教えていたり学校が教えていたりするわけなんですけども、先程鍵山さんのほうからありましてあけれども、企業の責任ということで、それで有名なトイレ掃除で鍵山さんは有名ですけども、この辺のその心っていいですか、なぜこれをされたのか。そして企業教育ってこと、ある程度根本的なところにこれを持ってこられた理由なり、

それと同時にもう一つはやり方を、みなさんにちょっとご披露願えればというふうに思うんですけど。

(鍵山) はい。今いただきました課題の前にですね。私の自立ということについて、ちょっと触れてよろしいでしょうか。

(小沢) はい。

(鍵山) 私は、昭和8年に東京で生まれまして19年の9月まで東京にすんでおりまして、戦争で岐阜県の山奥に疎開をいたしましたけれども、東京に住んでいる11歳までは、とてつもない少年でございまして。子供でも将来どんな大人になるか心配になるというような、そんな少年時代を送っておりました。それが、なんと180度の転換をしましたのは、戦争のおかげでございまして。実は私が物心ついたとき、私の家は大変裕福で何も無い物がない、何でも欲しい物は与えられるというような...そういう状況でございまして。それは両親が苦勞をしてきた結果、つい子供に甘くなったということだと思っておりますが、そういう少年時代でございました。12歳で岐阜県の山奥に疎開をいたしまして、そこで両親がとてつもない労働を目の前でしている姿を見て私は、放っておけない...これは子供でも放っておけないという気持ちになって180度転換をしたわけでございます。

そのことから子供の心ですねを、良くするのも悪くするのもまず第一に両親であるということですね、ことを私はもう、固く信じております。不幸にして両親がですね、早くして失われた人は周りの人たちの影響がいかに大きいかということ。先程ちょっと触れたように、大人の責任が大きいということになるわけでございます。

私が掃除に取り組んだ理由は、人の心を穏やかにしたい。荒れた心・すさんだ心はですね、自分自身を不幸にすると同時に世の中の人々を不幸にするというですね。社会を悪くするというのを両親からずっと学んでまいりまして、本当にそうだと思うことにたくさん会ったわけです。そこで人の心をすさんでいるところから、穏やかな優しい温かい心に変えていくためには、生活環境・職場環境を徹底してきれいにすることであると。特にその中でも、トイレのように人の嫌がる場所を上に立つ人が率先してですね、身を低めて謙虚な態度で取り組んでいく事が大事であると。それが会社の人たちの心を、穏やかにする元であるというふうに確信をして取り組んでまいりまして。

最初の10年位は何の効果もありませんでしたけども、10年を越える頃から少しずつ効果が現れるようになりまして。20年を過ぎる頃には会社全体の活動になりまして、30年を過ぎたところから「掃除の仕方を教えて欲しい」といって来られる方々が増えてまいりました。その方々のおかげで『日本を美しくする会』という会が誕生いたしました。

実際に活動をしたのは平成5年11月からでございますから、今ちょうど10年経ったんですけども、その間に日本中に活動の拠点ができて、そしてこれまで荒れ果てていて何人も

手が付けられなかった学校が、見事に立ち直ったという実例をたくさん私は発見することができました。ますますこの活動がですね、いいということを確認をいたしまして、今全国の方々と一緒になって、荒れた学校を荒廃している学校を集中的に掃除の力によって変えていこうと、このように確信をして取り組んでおります。

今東京都の副知事になられた竹花豊さんという方のご指示で、東京都の教育委員会から5つの高等学校をやってほしいというふうに、具体的に名前を挙げて要請を受けておりますし、毎月1回新宿の都庁の周りを、毎朝早い...夏は5時半から冬は6時から、毎月1回やっております。もう1回は、新宿駅東口から東京の犯罪の巣である新宿の歌舞伎町というですね、とてつもない町でございますが、この町の掃除をするということを今年から始めております。さすがに汚れていたところでも回を重ねてやるたびにですね、だんだん目に見えてゴミが減っていくという事実を見ましても、間違いなくこの活動が人の心を変えていくという事を、私は確信を持っております。

ということで、どうかみなさんが暮らしの環境を、生活環境をきれいにすること。職場環境も、それからみなさん方の子供さんあるいはお孫さんが通う学校をですね、保護者・先生・生徒と三者一体となってきれいにしていくという事を、私はお勧めをいたします。よろしいでしょうか。

(小沢) どうもありがとうございます。鍵山さんのところは『イエローハット』と、みなさんご存じの車部品の、こういった会社をずっとやってらっしゃるわけなんですけど。実をいいますと、この『イエローハット』さんが富山に出て来られるときに、それに対抗する大手チェーンの幹部が「大変だ」と。大変な手強い強敵が入ってくるんだという話を僕にしたわけですね。何でそんな、手強いんだ？って言ったら、彼らはしっかりと哲学を持ってると。だから今まではこんな怖い相手はいなかった。ところが哲学を持って、あれだけのことをやって入ってこられたものは、ちょっと大変だということ、そういう話を聞いたことがありますね。

そうしますと、事業の世界というのは今お話になったように、そういった心持ちとか感謝の気持ちを前提とした心持ちでやっても、結果がどうなのかっていうのをいつも問われるわけなんですよね。それではっきり言って、鍵山さんのところはちゃんと結果を出してらっしゃるわけなんです。これはどの世界でも、最終的に求められるのは、イデオロギーは結構だと。それで結果は？なんです。そういったことも非常に大切な要素になって来ると。ですから、非常に学ぶべきことが、本当に大きいんじゃないかと思えますけども。

百瀬さんのほうで、先程「親学の崩壊」という事。それから人間学を、子供たちが本当に学びたがっていると言いますかね。その中で、先程もちょっと話していただいたんですけども、人間として親としてその方法論といいますか、そのさわりの部分みたいなところっていうのは、何かございませうかね。

(百瀬) はい、わかりました。親と子というのは、特別な関係なんですね。親があって子、子があって親ということで片方だけに目を向けていると、必ず問題が起こるといいます。バランスというものが全てにおいて大事なんですね。親は子によって、さっき「育児は育自」と言われましたけれども、育てられるといいますかそういう意味でまず、意識づくりというか。意識というのは単なる考えではなくて、当然それに見合った行動が伴いますけれども、変革の時代の一番肝心なことは「意識変革」ですね。親意識...親とは何なのか。いろいろ言い方があるでしょうけれども、私は、親は子育ては偉業であると言っています。偉大な業績っていいですかね。人を育てる以上に重要な難しい、やりがいのある仕事は、私は無いんじゃないかと。しかもそういうことが子を持つことによって、ちゃんとできるそういうチャンスが与えられているという。そういうことですね。

我が子をちゃんとそれなりに育てるといえることは、それなりの人脈づくり。よく「S型」「F型」と私言いますけれども、また後で説明を機会があればいたしますけれども。「S型人間」つまり前向きにどんどん事を成していく成功型タイプと言ったらいいいでしょうかね。そういうタイプのお子さんを、自分の人生持ち味を十分発揮してですね、自分の事はさることながら、社会に役に立つことをどんどんしていくという。

「自分」というのは、「自分」の「自」と「分」というのは社会の一部とということ、で、「自分」と言っているのは二つが一つになっていてね。ですからそういう事に、ちゃんとやっていける子ができるような事をしてあげるのが親の役割なんですけども。

それには、今言った我が子がどうして授かったかっていう事も含めた意識ですね。子供は天からの預かり物ということを言われています。授かり物よりも一歩先ですね。あなたは立派にお子さんを育てて、社会に返して還元して下さる事ができる人ということで、信頼して預けますよと。わかりました、ということでじゃあやろうということで、ちゃんと育てるといいます。そういう意識でちゃんと一人を育てると、人脈がどんどん時間と共に広がっていきますね。子育ては一人を本当にちゃんと育てれば、あとは自動的にどんどん広がっていくという、そういうシステムになっているんですよ。ですから、「少子化の時代」と言っていますけれどもね、少子化それから高齢化というのは行き過ぎなんですけどもね。これはどういう事かということ、質の高い生き方・質の高い教育をするそういう環境作りを自動的に時代は演出しているというふうに見るべきなんです。そうじゃないですか？

子供が少なくなるということは、子供を育てるために過去の延長だけではだめです。過去の物を残さなければならぬものは絶対残さなくてはなりません。日本人らしき物というのは絶対必要です。でも、役に立たないものは脱皮してですね新しいものを作り出していく。

そういうことですね、ちゃんと一人の人間を育てればあとは人脈、そしてどんどん行くということを考えていただいて。手塩に掛けて育てる、さっき話が出ましたけれども。

「人間学」の基本をちょっと抽象的ですけどもね。彼らは自分がこの世に生まれて本当に良かったんだということ、確かにそのとおりですのでそれをちゃんとわかるようにして

やる。つまり人間に生まれて何が不足かと僕は言いたい。何に生まれたら良かったのかと。人間にしかできない、人間の持ち味は何なのかと。その持ち味を生かしてやれば人間は幸福にもできるように、素晴らしい人生を歩めるよう出来上がっている。その唯一の生き物が人間なのに。その人間の持ち味そのものをよくわからずにただ 漠然と生きていて、いいわけがないでしょう。細かいことがいっぱいありますので、私だけで終わってしまうので、あれですけども。柱づくりというのはそういう意味ですね。

黄金期にですね。黄金期と私あえて言っていますけれども。10代の前半をあえて黄金期と言っています。さっきの胎児期も黄金期です。それから乳児期・幼児期・学齢期いろいろありますね。みんな黄金期ですけども、そういう人間づくりの面で非常にコミュニケーションができて本格的な自立をする年代。これは今言った年代、14歳というさっき数字がありましたけれども。この年代というのはあえて、私人生の黄金期と言っています。みなさんが普通、反抗期と言っている年代です。反抗期と自立期と黄金期と3通り言い方がありますからね。反抗期というのは、形は反抗期なんです。つまり今人生の土台を作る素晴らしい時代に来ているのに気がついて、という事を伝えたいんだけどなかなかうまく伝わらない。だから一番困らせるというのはね、一番いい方法なんです。困らせることが目的ではなくて、困らせるという形をとっているという。ですから、形を見たら中身をつかむという、これ人の原則。これを知らないものだから「うちの子は悪くなった」どうのこうのということですね、マイナスの方向へどんどん行ってしまふ。絶好のチャンス、黄金期が来てるんです。ですから、黄金期にふさわしいことをね伝えてやるというのが当たり前前で。それには親がそれを教えられるだけの人生観・世界観がなければ話になりませんよ。人間の目的、持ち味は何なのか。人間に進化して得たものは何なのか。得たものを使うために得たんですから。それは、どんなものかということも1つでも多く知って、それを使っていくことが人間らしい生き方の基本だと私は思います。ですから人間の持ち味、そういったこのを彼らは真剣に求めているんです。そしていかに自分は素晴らしい存在として生まれてきたかということを確認する。自尊心の確立が決定的なポイントなんです。あの坂本龍馬も実は落ちこぼれなんです。14歳から自尊心を得て

\*\*\*\*\*録音テープのつなぎ部分の為、一部聞き取れません\*\*\*\*\*

(百瀬) ...たという。彼はまさに変革期の生き方のお手本を、至れり尽くせりをちゃんと残しているんです。私ある時、龍馬を書けという指令がピンと来ましてですね、それを書くはめになって、来年の春「龍馬の夢は君たちの夢」ということで、私みたいな人間が書いた本だから、どうかわかりませんが。生徒から夢について書いてくれということもどんどん来てるんですよ。だからついこの間「夢のある本物の人生を生きよう」ということで、またこれPRで恐縮ですけども、一応お伝えしますけど。これ小学館から、学校のテキスト風にも使えることで。早速それを使う中学校が現れて、もう始まっていま

すね。福島県のオクダカ中学校というところですけど。この前講演に行って来ましたけれども。トップの先生方が行動を移すと一気に行くということで、これは家庭でも、お父さん・お母さんでもいいですけど家庭教育のリーダーシップ、率先垂範していくというそういう意味で「家庭ゼミナールのすすめ」というキャンペーンもやっています。週1回でいいからコミュニケーションを設けて、半分はそういった生き方を学び合う。半分はコミュニケーション。最近働いているお母さんが多いので、今週はこういう予定ですから、あなた頼むよと。自立期は任されると真剣にやるんです。そういう意味で、お手伝いなんかどんどんさせると、子供は喜んでやりますからね。そしたらちゃんと認めてやるというようなことで。そういう家庭ゼミナールをやることによって、一気に全てが解消する位の効果があるという事例もけっこうあります。富山県の小矢部市でそれが始まりましたので。そんなご縁で、今日みなさんとお会いする機会になったんですけど。そのあたりのことは後で、詳しくお話ししたいと思いますけれど。ちょっと長くなりましたけれど、そんなことです。

(小沢) どうもありがとうございます。今のお話にありました親意識を持つという。今いろんな事が崩されてきているんですね、価値観も含めて、より正しい価値観を形成するということが、すごく大切な1つの時代になってきている。そうしたときに時代の流れ、先程高橋先生のお話にありました、自己実現という。自己実現がいかにも最高の価値観のように思っていますけれど、これは後2~3年で終わると言われているんですね。2005年くらいから価値観が生まれると。それは私はどういう役に立てるか、立てないか。いよいよもう一段高いレベル価値観が生まれてくるだろうと。自己実現という、これはマズローの要求段階説の中から捉えていけば、すぐにわかることなんですけど。ところが今何でも自己実現。子供の前に私というそういう発想がもの凄く強いんですけども、こんなものはどれだけでも変わっていく1つの発想なんだと思います。それを、その価値観というものをしっかり捉えておくということ。そのためには、正しい人生観を持つという今お話がありましたね。

もう一つはコミュニケーションの大切さ。それとゼミナール等のお話がありましたけれども、学ぼうとする姿勢というか、新しいものに挑戦して学んでいかなきゃいけないんだと。これが、大人がやっていくべき1つの課題でもあるというふうに思います。

それで、先程高橋先生のお話にあった厚生省でいっていた、親と子のふれあいというか...乳児期に。これ母乳の問題であがってきたんですね、スキンシップをやる。母乳をやっているとその母乳で育った子は、いじめっ子にもいじめられっ子にもなる確立が非常に少ないという、まず最初に話が出たんです。ところが、これを反対していた。そういうことを出すなど。母乳をあげるのが嫌だったんですかね。なんかわからないんですけど。それで厚生省が、それを引っ込めていったんですね。そのデータははっきり残っているんです。スキンシップの大切さということで。

それで今の日本の母親というのは、これだけ栄養に期をつかしながら、本当は栄養にならないトウモロコシを食べている南米の母親のほうが、母乳量が3倍・4倍出るんですね。そうすると単なる栄養学ということじゃなくて、全体的に食事学っていう見方をしないとなかなかわからなくなっていると思うんですけど、この辺り松村さん、いかがでしょう。

(松村) 今ほどの食事学でございますけれど、それでは日本の食事学、そして富山の食事学はなんだろうということなんですね。私は、やはり南米はトウモロコシですけども、富山は米だろうと思います。先程ちょっと言葉が足りなかったんです。五分づきということを行いました。なぜ今それが大切かということなんですね。それは白いご飯は、中には胚芽が抜けていますので、白いご飯をいただいた場合、何ていうか働く力になるわけなんですけど、その働く力としてエネルギーが出るときにはビタミンB群、ミネラルを必要とします。ところが白米にはそれがないものですから、非常に他の副食でそういったミネラルを補完しながら、エネルギー化していくわけですね。それがもし、ミネラルが不足していたら、食べた後すごくいい気持ちになるんですけど、すぐ眠くなるとか...そういった十分にミネラルが不足していると消化不良を起こして、不消化分が疲労物質として体の隅々にたまっていっちゃうんですね。そうしたことを考えたときに、五分づきの場合、胚芽がきちっと残ります。そして食物繊維をとれるものですから、五分づきの主食をしっかりよく噛んでいただくことによって、大きな体の中にそうした栄養価が入っていくと。いうようなことを思いまして、五分づきっていうのはこれからの食事学の基本になるだろうという事を思っております。

いろいろと環境問題とか、そういった事がいろんな分野で叫ばれております。環境にやさしくしなさいとか。そういったことを考えたときにもですね、もう少し自給力・自給率の面で、エネルギー付加を考えたときにですね畜産も一部では大事なんですけども、穀類の4倍の力が畜産はいるものですから、やはり穀類をもう少し大切にして食事学のベースに置きながら、しかもそれをどのようにして実践していくかということなんですね。

私は、今みなさま方と一緒に分かち合いたいのはですね、是非とも「親学」の中で分かち合いたいのは、家庭の十八番作りが途絶えているということでございます。この十八番作りのベースにですね、なんとかして家庭行事として1年に何回かは、こうした五分づきの団子を作ったり、あるいはまた、色々と餅をついたり。あるいは色々な伝承料理を研究したりする、そうした十八番作りをですね、更に子供さんと一緒に体験していく、一緒にやっていく。そして子供さんにおもしろさを、何て言うか見いだしてもらってというか。そうした活動が大切ではないだろうかと思っております。

家にも孫がおりますが、孫と一緒に団子をすると「おばあちゃん、僕作る」と言ってですね、非常に丸い形とかいろんな形作りをするんですね。そしてそうした時の目は、キラキラ輝いております。どうぞ共に、子供さんと一緒にできる体験の場をですね、創出してそ

れを習慣化して「今度いつ作る？」というように、楽しいコミュニケーションの1つにし  
ながら、かつ実践していただけたらうれしいなと思いますし、私もそうした道に精進した  
いと思っております。ありがとうございます。

(小沢) どうもありがとうございます。そうですね、世界中共通している事だと言わ  
れているんですけど、母親を「マザー」という「M」の音から始まりますね。日本でも赤  
ちゃんが「まんま」っていう。この「M」の音というのは最初の音で、やっぱり最初は食  
事の音だろうと。それから、外国の「マザー」というのは、本当は食事なんですね。食  
事やり係っている。そういったところ入っている。ということは非常に単純なこともし  
れないですけど、その単純な本当の出発点というものは、非常に大切だということは我々、  
自覚しておく必要が1つあるんじゃないかと思います。

色々とお話願ってきたわけですけど、最後にせつかくこれだけお集まりになって、これか  
ら本当に何をやっていかなきゃいけないか。今世界中が、色々な価値観の変動とか、いろ  
んな事が動いている中で、一番子供たちが迷っている。子供たちがなぜ迷っているかとい  
うと、親がちゃんとしたことを提示していないというところで、キーワードっていいま  
すか、「親学」の根本になるっていうか、先程高橋先生は、「母性」と「父性」の共存と言  
うことを言われましたけれど、何かキーワード的にそれをお一人ずつお話していただ  
けませんか。まず高橋先生いかがでしょう。

(高橋) 今日PQが育つ中で、1つ補足させていただきたいのはですね、子供が選  
んだ体験がPQを育てるといふのがあるんです。脳科学者が言っている中にですね。押し  
つけた体験ではなくて、子供がこれをやりたいという体験が子供のPQを育てると。これは  
「トライアルリーグ」という兵庫県の、不登校児が5日間体験活動をして78%の不登校  
児が戻ってきたという実例がそれをよく示しているんですけど。それは不登校児の第1希  
望を全部聞いてるんですね。「おまえら、体験しろ」だけじゃなくて親子も共に体験する  
という。私はそれを師範塾で例えば、萩遥堪、吉田松陰の歩いた道を32キロ歩く、龍馬脱藩  
の道60何キロありますけれど、それを一緒に歩く。というような共に困難を乗り越える  
体験ということが大事なことかなと。結局「親学」という場合にも、継続的に変わって  
いく場を作っていくかなくては、なかなか1回や2回の講演会では変わりませんので、  
親学の築きの場を、しかも体験を共有しながら変わっていけるような場を作る必要  
があるのかなと思いました。それから先程、鍵山先生のお話を聞きながら、私元々師  
範塾を作ったのは、松下政経塾の審査員をさせていただいて教育を担当させていただ  
いて、国会議員に今度の選挙26人になりましたけれども。松下幸之助さんがいつも  
「おまえら、便所掃除をしとるか」とこれだけをおっしゃっていて。つまり着眼・大  
局・着手・小局と、私はいつも志審査という審査の基準でそう決めていたんです  
が。地球環境を守りたいと大きな事を多くの方が言うものですから、「じゃああなた  
方、地球環境を守るために自分の生き方をどこから変え

るんですか？人が見ていないところで、どういう地道な実践からはじめるんですか？」と。僕は小さな着手・小局だけを質問して、答えられないのは落としていったんですけども。『凡事徹底』という、これも「ローヤル」という前の名前だそうなのですが、私そこへも行かせていただいて、今日申し上げた「育児は育自」というのは、まさに「凡事」なんです。育児は。その平凡な毎日の育児の中で、自分の心が、親が育っていく。あるいは教師が子供とのかかわりの中で変わっていくという。これが今日百瀬先生がおっしゃった「人間学」ということをおっしゃいましたが。PQというのは、みなさん今日ちょっと違和感があったかもしれませんが、「人間力」のことだと思っていただいてもいいと思います。その人間力の原点は自分探しですから、自分の存在価値。今日自尊心という話も出ましたが、豚の出産シーンの授業を長野で見たことがあるんですが。そのあとお母さんが、我が子を生んだ時の気持ちを作文に書いて、それを読み上げた小学生がほとんど泣きじゃくって、立ちつくして座ってしまったのを私良く覚えているんですが。それは、お父さん・お母さんは自分の存在を待ち望んでくれていたんだと。そして自分が生まれてきたことを、こんなに喜んでくれたんだと。存在ということを楽しんでいたはずなのに、いつの間にか親にとってのいい子というものを求めるようになっていく。その違いを感じたということを感じました。

もう一つだけ言って終わりますけれど、僕家庭の機能が3つあるとあっていて。価値観というものを形成していく地盤。それから人間関係の原型を学ぶ場。そして老人との共生、これは今なかなかもう難しいんですけども。ある方が私のところへ来まして。ハーモニカの名人なんですけども。童謡を1時間歌って帰られたんですけど、その方が「親守歌」を全国に広げたいとおっしゃいました。「子守歌」と同じように。人間は生まれる、3歳位までは親の助けを借りないと生きていけません。同じように亡くなっていくときには、また1人では生きていけません。同じように子供が親に対して「親守歌」を歌って、そして看取っていく。そういうかかわりというものが大事になってきているんじゃないかというようなことも、補足させていただきたいと思っております。なお、着眼・大局・着手・小局ってというのは、1人からの出発と。誰かが悪いという責任転嫁をしないで、まず自分が変わるというところから、身近な、トイレ掃除も同じでございますが学級崩壊をしている学校も、私ずっと見てまいりましたがある学校はトイレ掃除を外注していました。それは、外から来てもらってやってもらうと。そして心の教育をやると。私、おかしいと。トイレを掃除しないで、どうやって心を育てるんだ。そんな考え方の混乱が起きているわけで。それで学級崩壊を1年間で解決したんですけど、トイレが一番きれいになりました。以上でございます。

(小沢) どうもありがとうございます。そうですね、ここでPQというのはIQという「知能指数」という言葉があって、それからやってきたEQっていう「エモーション・クワンシメント」感情指数という言葉があって、今はPQの時代だっていわれて。

これ「プリ・フロンタルローブ」で「フロンタルローブ」というのは前頭葉という意味ですね。「プリ」がついて「前」がまたつくわけなんです。これは以外と時代のキーワードになってきて。21世紀は刑務所のない時代になるだろうとされているんです。といいますのは、犯罪を犯した人間にある...そうですね耳飾りみたいなのを付けさせて、このPQってというかプリ・フロンタルローブをコントロールすることによって、犯罪をおこさせないという、そういう研究が進んでいておそらく将来的にはそうなるだろうとされているキーワードなんです。ですからこの言葉は、せっかく教えていただいたわけですから、時代の最先端に行く脳生理学の言葉ということで、覚えていらっしゃると子供にも自慢できますんで、この辺りもしっかり捉えておかれるとよろしいというふうに思います。鍵山さんのほうで、何かキーになる言葉ということをよろしくお願いします。

(鍵山) はい。カーライルの本の中に「最大の教育は手伝いをさせることである」という事が出てまいりまして、私は自分の人生体験からして、いかに親の手伝いをする人の手伝いをするということが、自分の人間形成に大きな力を持つということを経験してまいりました。もう1つカーライルは「悩んだときは針箱を整理せよ」ということも書いておりまして、乱れたところをきちっと整理することが、心の悩みを取り去る大きな力になる、とこういってくださいます。もう1つ子育てについて今、誤っていることを私は感ずることがあります。それは、創造性という名の下に無秩序を放置しているということ。ルールを守らない、秩序が保てない。それがいかにも創造性が高いとかのように錯覚をしていること。また、わがままを個性の尊重だというふうにですね、みんなが捉えている。ここに問題があると思います。先程高橋先生がですね、やっぱりそこには強制がですね、ある程度の強制が必要であるという事をおっしゃっておられまして、やはりこれはとても大切なことだと思います。この錯覚をですねもう一度見直して本当の個性であるのか、創造性であるのか、無秩序に過ぎないのか、わがままではないのかという事をしっかりと見極めていっていただきたいと思います。

(小沢) どうもありがとうございます。今1つのキーワードとして「手伝い」というのがありました。昔親戚のおばあちゃんが言っていたんで、僕が言ったんじゃないんですけど、嫁にもらうんだったら箸の上げ下げというか...箸より重たいものを持たせたことのないような娘は、絶対に貰っちゃいかんと。何しろ手伝いという概念。手伝いということをやったこなかった人間は、何もできないんだということをしかり言われて、今鍵山さんの手伝いをさせるという、これは今本当にしかりそれを通して、これは1986年に出てきたアメリカの論文なんですけど、幸せになる子は人を手伝うということを経験してきた子が、100%幸せになっていくんだということを経験、アメリカの統計学でといったことを言っているわけなんです。そうすると「手伝う」という発想、これも非常に大切な要因になってきているんじゃないかと言うところだと思います。

百瀬さん、いかがでしょう。

(百瀬) 簡単に言うと「悪いことをするな、いいことをせよ」ということだろうと思うんですね。今の子供たち共通の1つの傾向として、過小評価するというのが一般化しているという結果が出ています。高校生や中学生の意識調査をしますとね。自分自身を過小評価する。いかに自分がダメ人間かということが一般化しているという結果がでているんですね。これはなぜなのかというと、そういう情報ばかり浴びながら育ってきた結果なんです。家庭の中ではどんな言葉が飛び交っているか。明るい子供は明るい言葉の中で育っている。暗い子供は暗い言葉の中で育っている。心のすさむ子は荒い言葉の中で育っているとかね。そういう原因が必ずあると思うんですが、根底をただと言葉とは何なのか。言葉というのは、1つ言えば現象を生み出す力ですね。言霊ということがありますけれども。事と起こる中身の事が1つになっている、これを「 」といいます。だめだと言っていると、間違いなくだめな人間になってしまうという。ですから言葉をいかにコントロール...有効に使うかという、これがきわめて重要で一番確実で、一番早い方法の1つなんです。日常どんな言葉を家庭で使っているか、どんな言葉を使わせているか。学校でどんな言葉を使っているのか。人間は言葉と手を使うことによって、人間になったわけですからね。そういう大事なものを大事なりに扱うということは、当たり前なんですけど。そういう意味で、家庭環境の中で言葉はどのような言葉を交わしているか。ですから元をただと、もう一步進み出すとどんな考え方をしているか。こう考えてるとこうなるという。それを具体的に表すのが言葉でありイメージなんですけどね。

パスカルの言葉「人間は考える葦である」というこの言葉は、これ1つが人間を象徴しているんですね。これで全部片付くというくらい大事なのがパスカルの「考える葦である」こういう言葉を、子供達にパスカルはこういう言葉を言っているって言うだけではだめなんです。パスカルはあなたの為に、先輩としてこういう言葉を残してくれているんだから、これは大事なことだ。自分に合ってる自分の言葉に置き換えなさいと。パスカルはいつも目の前で大事なことを叫んでくれているんだと、いうふうな対話の姿勢を持ってそのものを意識していくという事がね。坂本龍馬の言葉に「世に生を得るは事を成すにあり」とかね。夢を実現するようになっていくということが、この言葉が全部表しているんですよ。この言葉というのは、何冊もの本の凝縮されたようなものですからね。すばらしい人たちの言葉というのを全部自分に味方にしていくというのが、賢い人のすることなんです。そういう習慣作り。それは親も子供も一緒にやればいいんですね。そういう意味で考えるということは何んなのか。それが人間の象徴である。全てはそれで解消できる。そして大事なことは、人間は偉大な能力を使って偉大なことができる唯一の生き物であり、それを私は創造性といいます。創造性はあらゆるものを生み出していく。創造性であるということは、自分から進んでこういうことをしよう、夢を実現しようということがどんどんできる唯一の生き物が人間。他の生き物はやる事が決まっていますけどね。決まってい

すけど完璧にやることだけは学ばなくてははいけませんけれど。人間は自分で事を選択して達成することができるという、夢を実現する唯一の生き物。そういうふうにはできあがっていますから、そういった事実...確実な事実をまず知って、知った上でやるということが非常に大事だと思います。「人間は考える葦である」ということですね。

(小沢) ありがとうございます。言葉の大切さということ、これはしっかり捉えておかないと。確かに一流の家庭・一流の企業は、言葉が一流なんですね。一流というのは相手の事を考えた言葉が発せられていると。言葉はものすごく大切だと言うことだと思います。

松村さん、いかがでしょう最後に。

(松村) はい。私は次の代、21世紀も元気に子孫が繁栄して、また世界の中で通用できるそうした体質作りの柱をスローフードと、地産地消とかですね、伝統食とか。あるいはよく噛むとか、本物の味を作るとかいろいろございますが、そういったようなことを含めて、スローフードを提案したいと思っております。そして実践してしあいたいと思っております。いずれにいたしましてもですね、よい体質はよい習慣から生まれて、そしてそれがまた喜ばれるともうしますか、自分で非常に手応えのある人生へと繋がっていくのではないだろうか、ということをおもっております。日々三食口にする食事の中にこそ、そうした思いの深さ、思いの暖かさを見いだして共に歩かせてもらいたいと思っております。よろしくお祈いします。

(小沢) どうもありがとうございます。ちょっと時間がオーバーしましたけれども、ここでまとめるも何も、みなさん色々お話をしましたので最後に一言だけみなさんのお話をおうかがいして、今日の1つのキーワードということでまとめておきたいのは、「ラブアンド ディスプリン」愛と規律。だから先程高橋先生がおっしゃったように、子供をしっかり抱きしめてあげなさい。無条件で愛しなさい。無条件で信じなさい。でそれを、しっかり下に下ろして自分で歩かせなさい。これが愛と規律というのがすごく大切な、お話の中でみなさんのテーマだったような気がします。

みなさん、それぞれお感じになったところが、あると思いますが。

(高橋) 一言だけいいですか。

(小沢) はい。どうぞ。

(高橋) すいません。短くやります。今日、反抗期が黄金期という話がありましたが、その時にどうかかわるかがとても大事で、今日師範塾の話をしてしまいましたが、2期生で

入ってきた方が「一寸先は光」といっております。「ネバーネバーネバー・ギブアップ」といっております。「仕事と思うな、人生と思え」といっております。的は誰か、私です。今やらねば、いつできる。私がやらねば誰がやると。脳科学で心のエネルギー源は何かというときに「信念 ビリーフ」と「デザイナー 願い」だと。こういう研究があります。大人や教師・親が子供に対してどういうふうな思いと信念をもって関わるか。これが反抗期を黄金期に変えてしまうエネルギーになるんじゃないかと思いました。『五体不満足』を書いたあの乙武君のお母さんが、1ヶ月経って初めて会って「かわいい」と言ったと書いています。そういうふうに子供の本質を見て、決してかわいそうにとか、そういう事はいっさい言わなかったし、そういう表情もしない。そう関わったわけです。存在の本質に関わったわけです。そういう関わりが子供を変えていくという、かかわり方が「親学」の一番の根本ではないかということ、一言補足させていただきます。

(小沢) どうもありがとうございました。今回非常に悲しいことでしたけどもイラクで、奥大使、それから井上一等書記官が亡くなりましたけれども、サウジアラビアとかああいうところへ行って働いている人たちで、商社マンなんかで共通の言葉があるんです。それはどういう言葉かという「3A」3つのAなんです。それは「あせらず、あてにせず、あきらめず」

ですから、これから子育ても「あせらず、あてにせず、あきらめず」そして今いろんな事が起き上がってきておりますけれども、それもしっかりやっていく。日本人として、あせらず、あてにせず、あきらめず...ということで進めていければ、必ずいい社会がくるんじゃないかというふうに思います。

ちょっと時間をオーバーしました。またちょっと、コーディネーターが口足らずで、申し訳ありませんでした。これで終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。

(司会者) パネリストとコーディネーターのみなさま。どうもありがとうございました。以上を持ちまして、第2回富山親学フォーラム第1部を終了いたします。

それでは、ここでパネリスト・コーディネーターのみなさま並びにご来賓のみなさまの退席となります。本日は誠にありがとうございました。